求められる「保育者」のあり方と子育て支援サービス

―保育者と保護者の意識の違いから見えてくるもの―

小池由佳

1．研究の目的

今日、幼稚園や保育所が子育て支援を行うことを期待されている。従来から果たしてきた役割に加え、保護者からのさまざまなニーズに応える形でのサービスの多様化、幼稚園や保育所を利用せずに地域で子育てをしている保護者へのサポートが、子育て支援として期待されている。具体的には、幼稚園では平成10年に新しい幼稚園教育要領が策定され、幼稚園が「子育ての支援のために地域の人々に施設や機能を開放して、幼児教育に関する相談に応じるなど、地域の幼児教育のセンターとしての役割を果たすよう努めること」と「地域の実態や保護者の要請により、教育課程に係る教育時間の終了後に希望する者を対象に行う教育活動については、適切な指導体制を整えること」（いわゆる「預かり保育」）が示されている。平成13年に文部科学大臣から発表されている「幼児教育振興プログラム」では、その基本的な考え方の中に「『親と子の育ちの場』としての幼稚園の役割や機能を充実させること」や、「地域で子どもを育てる環境の整備に努めること」が示されており、具体的施策として「幼稚園における子育て支援の充実」、「幼児期の家庭教育及び地域社会における子育て支援の充実」などがある。幼稚園での子育て支援サービスとして今日では半数を超える園が取り組んでいる「預かり保育」については、平成14年に文部科学省から「『預かり保育』の参考資料」が発表されており、取り組みに当たっての留意点が示されている。一方、保育所においても、平成11年には保育所保育指針の内容が変更され、保育士の保護者との積極的な関係づくりや保育所による地域子育て支援を行うことが盛り込まれた。具体的なサービスの充実は、新エンゼルプラン、少子化対策プラスワンといった政策を通して進められている。平成16年度の厚生労働省所管の概算要求では、第一に「次世代育成支援対策の充実」を掲げ、次世代育成の視点からも積極的に推進していく姿勢を示している。具体的には、地域における子育て支援事業の推進を図るための基盤整備の充実や、延長保育、休日保育、一時保育といった多様な保育サービスの充実が掲げられている。平成15年度税制改正に関連した「少子化対策の施策」においても、病後児保育（乳幼児健康支援一時預かり事業）の拡充が挙げられており、これら多様な保育サービスの推進によって、保育サービスは充実されつつある。

このように、幼稚園、保育所のいずれにおいても、今までのように園にやってくる子どもとその保護者のみを対象としたサービスだけではなく、その内容をさらに充実させていくことと、対象を広げていくことが求められている。しかし、このことは保護者が幼稚園や保育所に子育てを委ねてしまうことや幼稚園や保育所が子育てを取り込んでしまうことを意味するものではない。子育てを担う機関と保護者が共に協力し合って子育てを進めていくこと、互いの役割を理解し、補い合って子育てをしていくことが必要な時代であることを示唆している。幼稚園教育要領では、幼稚園教育の意義を「家庭との連携を図りながら、生涯にわたる人間形成の基礎を培うために大切なもの」と示し、家庭との連携において子どもの成長基盤形成を促していくことを示している。保育所保育指針においては、保育の基本として「家庭や地域社会と連携を図り、保護

者の協力の下に家庭養育の補完を行」うとあり、やはり保護者との協力関係が欠かせないことを示している。子育てを協力しながら進めていく上でポイントとなる保護者、保育者のそれぞれの役割について、鈴木ら（1999）は、保育士と保護者の保育や子育ての問題に対する意見の食い違いという視点から研究している。高濱（2000）は、子どもに関わる大人の役割や関係性についての認識を明らかにすることで、子育てにおける保護者の役割と保育者の役割について伝統的な役割モデルと新たな育児支援役割モデルを明らかにしている。しかし、保育者と保護者がそれぞれの役割をどのように認識しているか、という点から役割について明らかにしている研究は少ないように思われた。そこで本論では、保育者の役割及び保育者が提供することを期待されている子育て支援サービスについて、保育者と保護者の意識の差を明らかにすることで、求められる保育者の役割についてまとめることを目的としている。

2．方法及び手続き

この研究では、保育者と保護者のそれぞれが保育者及び子育て支援サービスに対し、どのような期待や役割を認識しているのか、その違いを明らかにすることを目的としている。方法及び手続きは、斎藤「保育者と保護者の子育てに関する意識の差異－求められる『保護者像』と子どもへの期待内容－」に準じている。

質問内容について、保護者の保育者への期待及び保育者自身が期待されていると感じている内容については、保護者、保育者それぞれの質問票において、「1．子どもが基本的生活習慣を身につけること」、「2．子どもが小学校に入学しても困らないような知識を身につけさせること」、「3．友達と仲良く遊ぶことができるなど、人間関係を形成すること」、「4．季節や自然、文化的行事にふれ、子どもの情操が豊かになること」、「5．園での子どもの様子を詳しく知らせること」、「6．子育ての相談相手になってくれること」、「7．子どもを公平に扱ってくれること」、「8．ピアノや手遊びといった子どもを保育する能力を高めること」の全8項目について、「希望している」から「かなり希望している」、「あまり希望していない」、「希望していない」の4段階であてはまるものを選択してもらった。その結果を平均点で集計している。

一方、子育て支援の必要性について、その必要性をどの程度認識しているかを4段階で尋ねた。具体的な必要性を認識している子育て支援サービスについては、特別保育事業等を参考に13事業を掲げ、そこから必要性を感じている事業を3つ挙げてもらった。掲げた事業は表1のとおりである。

表1　子育て支援サービス：アンケート項目

1. できる限り長時間、子どもを預かる（延長保育）
2. パート、育児疲れ等に応じて預かる（一時保育）
3. 産休・育休明けの子どもを預かる（乳児保育）
4. 保育所等を利用していない子どもと親をサポートする（地域子育て支援センター事業）
5. 高齢者との交流や小学校低学年の子どもを預かる（保育所地域活動事業）
6. 障害児を預かる（障害児保育）
7. 保護者の相談や悩みに応じる（育児相談）
8. 日曜日や祝日に子どもを預かる（休日保育）
9. 乳児を保育者の家庭で預かる（家庭的保育）
10. 病気回復期にある子どもを預かる（病後児保育）
11. 出産直後母親や子どもをケアする人がいない家庭をサポートする（産褥期ヘルパー）
12. 緊急一時的に子どもを見ることができない時に、家庭に行って子どもを保育する（訪問型一時保育）

3．結果と考察

1）回答者の基本的属性

回答者の基本的属性として、保育者に対し、勤務先（保育園・幼稚園）、運営主体（公立・私立）、調査時点での担当クラス、年代、経験年数について尋ねている。保護者については、就労の有無について尋ねている。いずれの結果についても、斎藤による前述論文に準じている。

2）期待する（期待されている）保育者のあり方

保護者が保育者に期待する役割及び保育者が保護者から期待されていると認識している役割について結果は表2のとおりであった。4点満点中3点を超える項目がほとんどであり、保護者の保育者に対する期待も高く、保育者自身もその期待を認識しているということが伺える。

表2　期待する（期待されている）保育者の役割

	幼稚園教諭		保育所保育士	P	幼稚園教諭		保育所保育士	P
基本的生活習慣の獲得	3.57	<	3.62		3.24	<	3.41	*
	(0.55)		(0.55)		(0.93)		(0.82)	
知識の習得	3.27	<	3.57	*	2.95	<	3.09	
	(0.78)		(0.56)		(1.01)		(0.97)	
人間関係の形成	3.48	<	3.62		3.54	<	3.61	
	(0.50)		(0.49)		(0.60)		(0.53)	
情操の涵養	3.41	<	3.63		3.29	<	3.56	
	(0.63)		(0.60)		(0.51)		(0.52)	
園での様子	3.44	<	3.50		2.78	<	3.09	
	(0.50)		(0.49)		(0.81)		(0.65)	
子育ての相談相手	3.44	<	3.50		2.78	<	3.09	
	(0.72)		(0.64)		(1.06)		(0.01)	
子どもへの公平な態度	3.45	<	3.69	*	3.51	<	3.57	
	(0.62)		(0.47)		(0.65 9		(0.60)	
保育能力の向上	3.11	<	3.29		2.84	<	3.04	
	(0.93)		(0.90)		(1.05)		(1.01)	

注：保育所保育士は3歳以上児担当者のみを抽出
＊ P<0.01

①保育者

幼稚園教諭と保育所保育士（3歳以上担当者を抽出）の認識の差について見ると、いずれの項目を見ても、幼稚園教諭より保育所保育士の方が保護者から期待されていると認識していることがわかる。保育所は幼稚園よりも在園時間が長く、それだけ子どもたちの生活の場となっていることからも、保育士の方がより多くの役割を認識しているということができる。t検定を行った結果、「知識の習得」（$t=2.62$　$p<0.01$）、「子どもへの公平な態度」（$t=2.76$　$p<0.01$）の2項目で有意な差が見られた。いずれの項目についても保育士の方がその役割を認識している割合が高い。「知識の習得」について、幼稚園は「教育」の場という捉え方から、すでに子どもたちに対し行っていると認識があると思われるが、「生活」の場である保育所ではそこまで行えてないのではという認識があるだろう。「子どもへの公平な態度」に差が見られたのは、次のようなことが考えられる。生活時間の長い保育所では幼稚園よりも、子ども同士の関係が、その子どもが楽しく園生活を過ごせるかどうか、また人間関係を形成していけるかどうかに大きく影響している。子ども同士が良い関係を作っていく

ためには、保育者がどの子どもにも分け隔てなく同じように接することが求められる。子どもをほめるときもしかるときも、同じ基準で行われることが大切である。子ども同士の人間関係を形成していくために大切な保育者としての役割であることは明らかである。またその結果が、保護者との円満な関係を形成することへとつながる。保育所保育士の方が、幼稚園教諭よりも保護者をより「子育てのパートナー」として意識して回答していると言えるのではないか。

保育士について、3歳未満児担当者と3歳以上児担当者（フリーを含む）という担当クラスの違いから見ると、図1のような結果となった。「基本的生活習慣の獲得」以外の7項目で、3歳以上児担当者の方が、高い数値を示している。t検定を行った結果では、「知識の習得」（$t=1.22$　$p<0.05$）、「子どもへの公平な態度」（$t=2.08$　$p<0.05$）の2項目で有意な差が見られた。「知識の習得」については、子どもの年齢を考えると当然の結果と言える。3歳以上の子ども、特に小学校就学前が近づいた子どもに対して、子どもが困らない程度の基本的な読み・書きを教えるのは保育士の役割と認識していることがわかる。「子どもへの公平な態度」について有意な差が見られたことは、前述の考察を裏付けるものである。保育士の子どもへの公平な態度とは、子ども同士のトラブルにおいても、どちらかを一方的に攻めたり非を認めさせるのではなく、互いのことを思いやれるような働きかけを行っていくこと等も含まれる。子どもが大人への「依存」から「自立」へと発

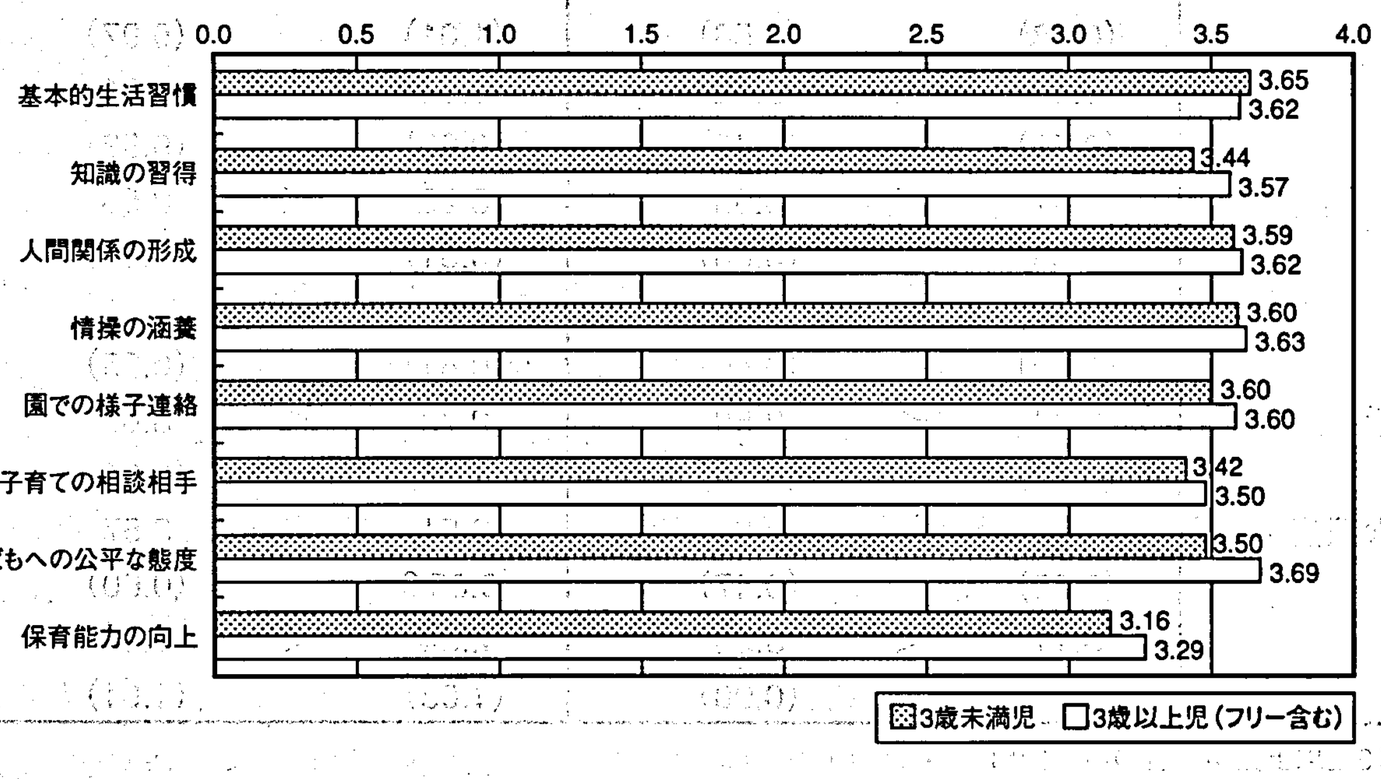

図1　保育士への期待（保育士担当クラス）

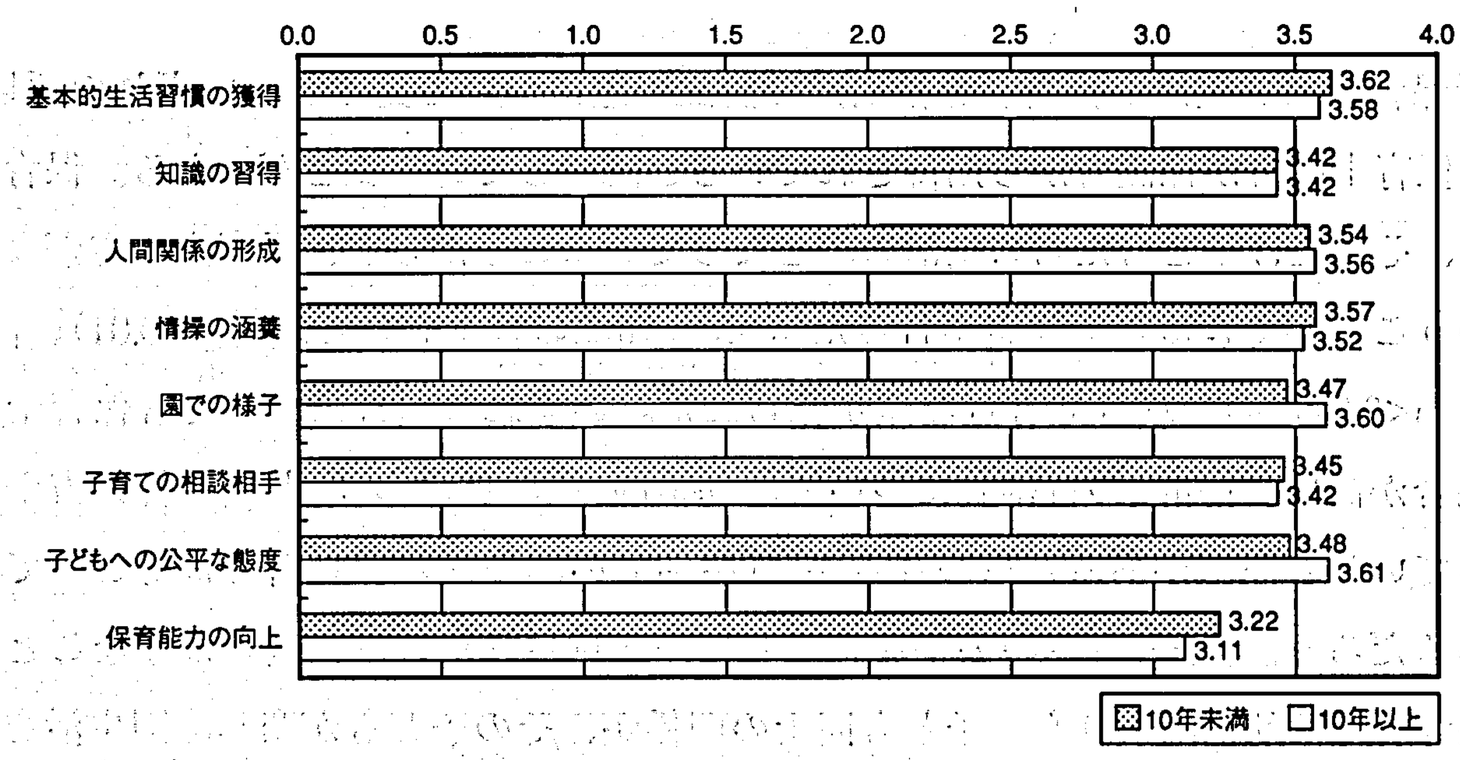

図2　保育者への期待（保育者経験年数）

達していく3歳以上の子どもを担当している保育士の方がよりそういった点に配慮する必要性を感じているということができる。

また、保育者の経験年数による違いは図2の結果となった。「人間関係の形成」、「園での様子連絡」、「子どもへの公平な態度」の3項目で、経験年数の高い保育者の方がよりその役割を認識しているといえる。t検定の結果では、「園での様子連絡」（$t=1.97$　$p<0.05$）で有意な差が見られた。保育の場面であったことを保護者にきちんと伝えることの必要性は経験年数を重ねるほど感じていることがわかる。自由回答においても、保護者から園での様子を伝えて欲しいという主旨のものが見られた。こういった保護者の声を受け止めているのは、やはり経験年数の長い保育士と言える。

②保護者

保護者同士で比較すると、ここでもすべての項目において、保育所を利用している保護者の方が、幼稚園を利用している保護者よりも数値が高い結果となっている。保育者と同様の結果であり、幼稚園よりも保育所の方が、保護者自身も「子育てのパートナー」として認識していると言える。t検定を行った結果、「基本的生活習慣の獲得」（$t=3.16$　$p<0.01$）、「園での様子連絡」（$t=4.22$　$p<0.01$）の2項目で有意な差が見られた。「基本的生活習慣の獲得」については、やはり日常生活を多くを過ごす保育所の方が幼稚園よりもその期待は高いと言える。「園での様子連絡」についても、保育所と家庭とのつながりのある子育てを進めるためには、保護者は子どもが保育所でどのような生活をしているのかを知りたいと願っていることがわかる。

保護者の就労の有無で意識の差を見ると図3の結果となった。すべての項目において、仕事をしている保護者の方が、仕事をしていない保護者よりも保育者に対する期待が高くなっている。t検定の結果、「基本的生活習慣の獲得」（$t=3.30$　$p<0.01$）、「園での様子連絡」（$t=2.55$　$p<0.05$）の2項目で有意な差が見られた。就労している保護者にとって、子どもが基本的生活習慣を身につけていくことは家庭だけでは難しい。自然と幼稚園や保育所に対する期待は高くなると言える。「園での様子連絡」についても、仕事をしていない保護者（回答者の基本的属性から、幼稚園保護者の73%、保育所保護者の8.6%が無職である。）の多くが幼稚園保護者であり、子どもの生活時間の多くが家庭にあることを考えると、仕事をしている保護者よりも期待が低くなるのは当然のことと思われる。また、この項目は保護者のみを対象としてまとめているため、「知識の習得」、「子育ての相談相手」、「保育能力の向上」の3項目が際だって低い結果となっている。先の表2からも、保護者のこれらの得点が低いことは明らかであるが、他の5項目が平均3点を超えることと考えるとかなり

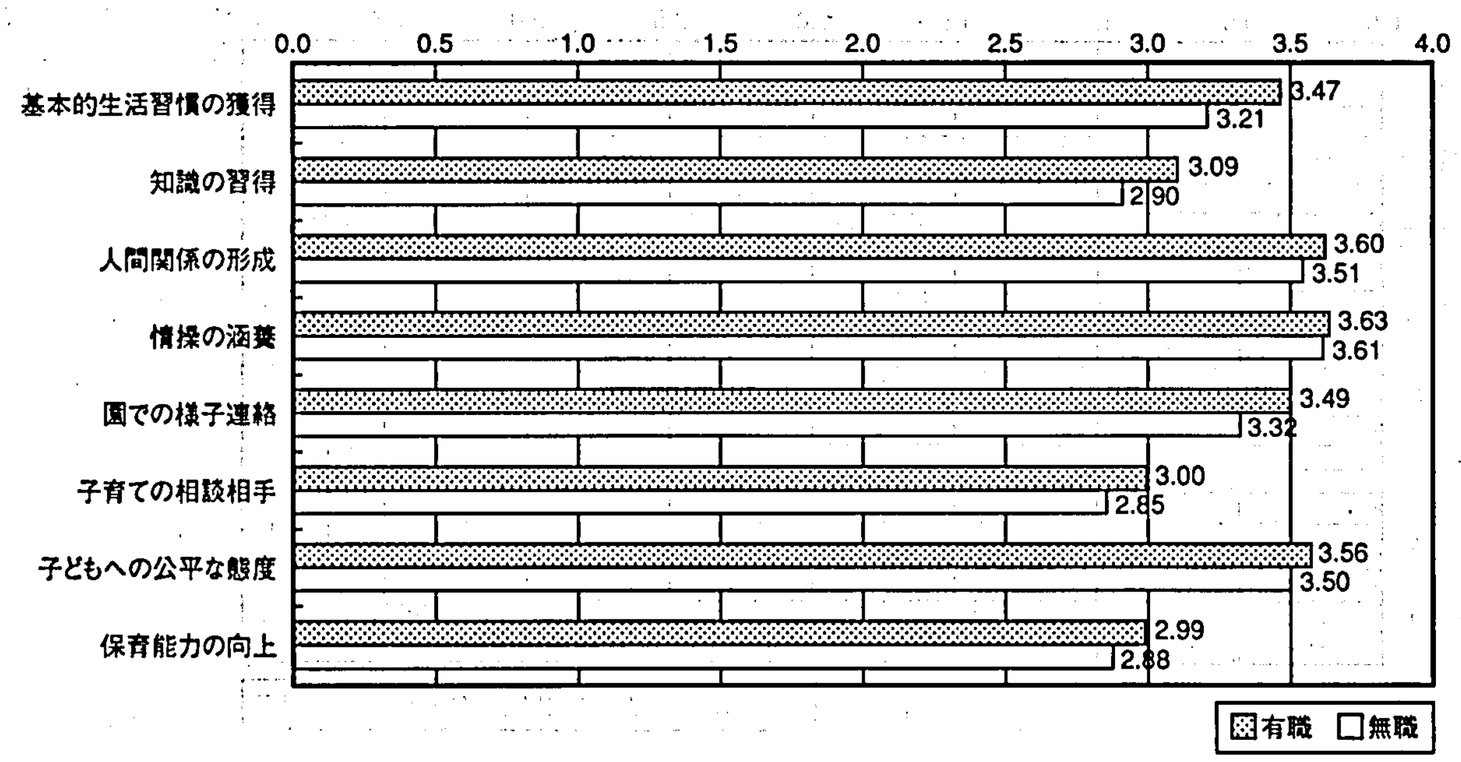

図3　保育者への期待（保護者：職の有無）

低いことがわかる。

③幼稚園教諭・保育所保育士（3歳以上担当者）と保護者

幼稚園、保育所それぞれにおいて保育者と保護者間での比較を行った。結果は図4、5のとおりである。

幼稚園について、t検定の結果を見ると、「基本的生活習慣の獲得」（t=3.95 p<0.01）、「知識の習得」（t=2.97 p<0.01）、「情操の涵養」（t=2.60 p<0.05）、「園での様子連絡」（t=2.51 p<0.05）、「子育ての相談相手」（t=6.33 p<0.01）、「保育能力の向上」（t=2.28 p<0.05）と6項目で有意な差が見られた。この6項目のうち、特に明らかな有意な差が見られ、得点で見ても0.3以上の差の開きがある「基本的生活習慣の獲得」、「知識の習得」、「子育ての相談相手」を見ると、幼稚園教諭は子どもが基本的な生活習慣を身につけることや、子どもが知識を身につけるといった従来から家庭で担ってきた役割であり、今も家庭で可能なことについては、あまり自分たちの役割であると認識していない。特に「知識の習得」については、他の項目との比較で見ても、3点に達しておらず、幼稚園が行うこととは認識していないことが明らかである。当然「子育ての相談相手」についても、子育てを基本的には家庭で行うことという傾向を示している幼稚園保護者にとって、幼稚園教諭は相談相手とはあまり認識されていない。「情操の涵養」については、保護者の意識がかなり高く、全8項目においても最も高い得点となっている。このことは自由回答欄に書かれた意見からも「幼稚園等で

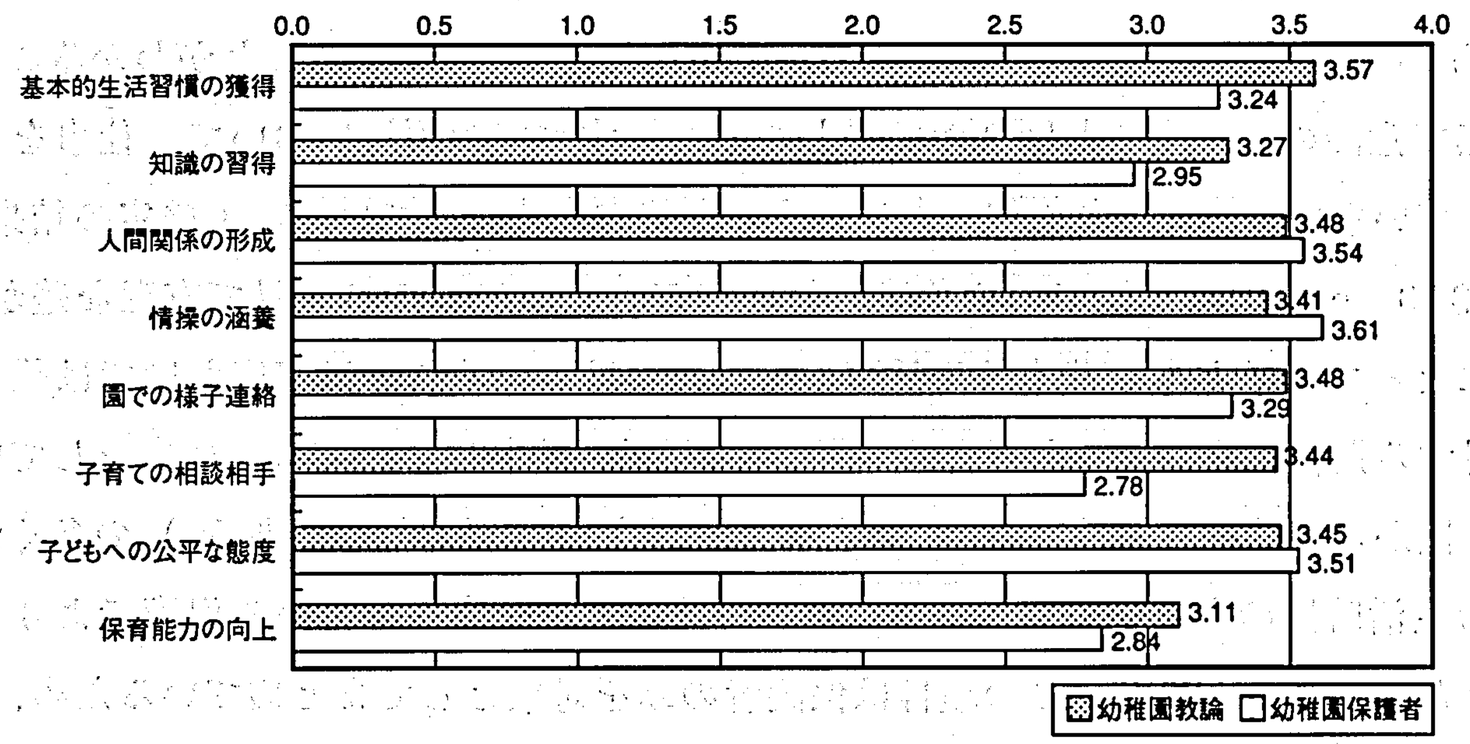

図4　保育者への期待（幼稚園教諭―保護者）

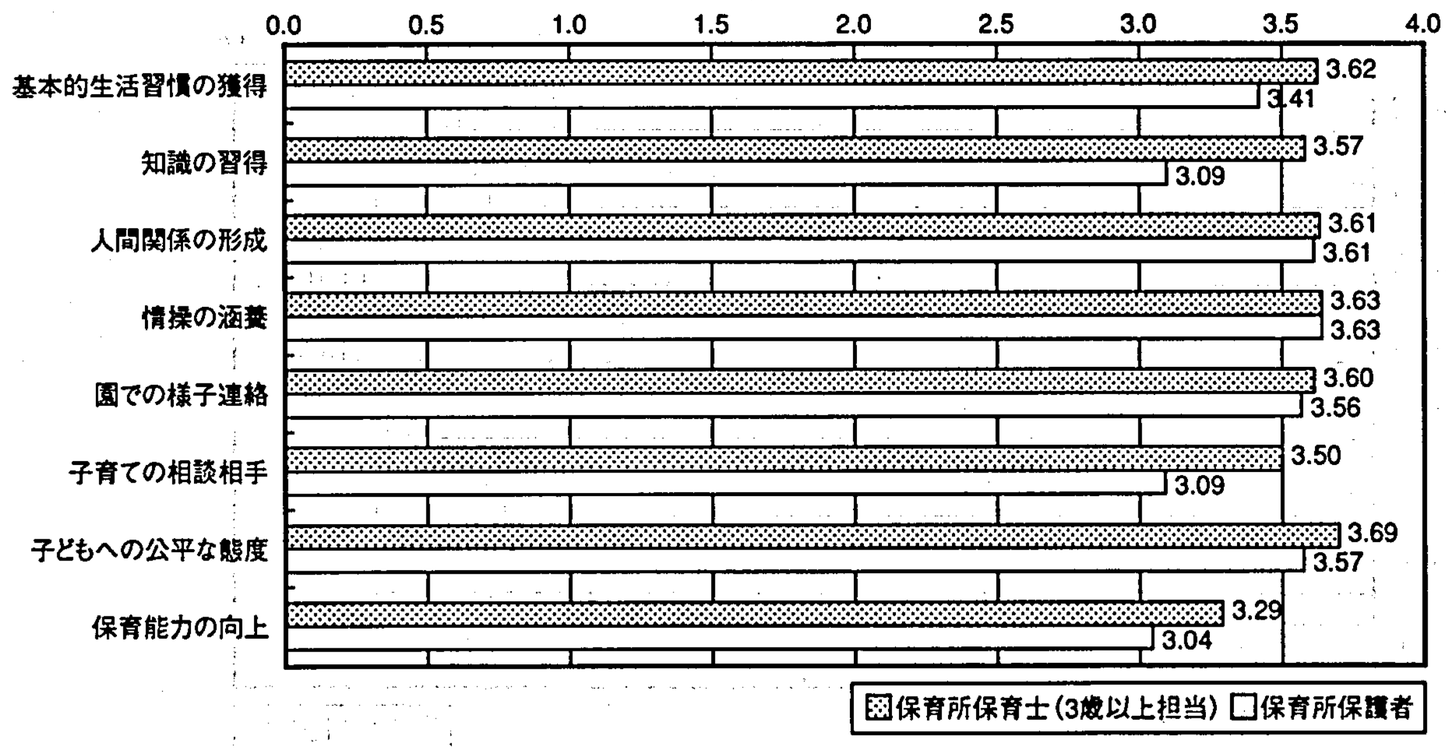

図5　保育者への期待（保育所保育士―保護者）

は家庭ではなかなかできない体験をさせて欲しい。今、家に畑のある人とか少ないので、そういう経験をさせてもらえるとうれしい。」、「家庭でやらなくてはならない事だと考えています。が、集団でしかできない事はお願いしたいです。」、「四季折々を体で感じさせてほしい。(毎日、散歩や外遊びをさせてほしい)」と明らかである。幼稚園という集団であることを活かし、今の家庭や地域社会の中でなかなか体験できないことを期待する保護者に対し、他の項目との比較で見ても（8項目中6位)、幼稚園教諭の方はその必要性を認識していないことがわかる。「園での様子連絡」と「保育能力の向上」については、幼稚園教諭の認識と比べて保護者の期待は低い。幼稚園側は園での様子を伝え、園とのつながりを持たせて欲しいと考えているが、保護者は幼稚園教諭ほどは認識しておらず、「つながりある子育て」というよりは、家庭での子育ての一部を幼稚園にお願いしている、といった保護者の傾向を裏付ける結果となっている。保育能力については、設問において「ピアノや手遊び」といった直接子どもと関わる際に必要と思われる技術を中心に尋ねているため、そのような能力については、今の現状で十分と認識しており、むしろ自由回答に見られるように、「ピアノ、手遊びというよりもっと他園などの保育内容を研究したり、もっと教材研究し、保育する能力（子供への言葉かけなども）を高めてほしいです。」、「親への子育てに関する、学習やお話をして、子育ての知識、意識を高めてほしい。」といった保育内容に対する能力や子どもともコミュニケーション能力といった部分での向上を求めていることがわかる。

次に保育所について見ると、「人間関係の形成」、「情操の涵養」がほぼ同じ数値であるのを除いて、6項目で保護者よりも保育士の方がその役割を認識している。t検定の結果、「知識の習得」($t=5.10$　$p<0.01$)、「子育ての相談相手」($t=4.00$　$p<0.01$）の2項目で有意な差が見られた。「知識の習得」については、すでに触れたように保育所はこれまで「子どもの保育」を中心に行ってきた社会福祉施設であり、子どもに知識を身につけさせるといった教育的な指導にあまり関心を示してこなかった。しかし、今日の幼保一元化の流れや保護者からの声を聞きながら、保育所であっても、教育的な指導の必要性を認識しているということができる。実際自由回答からも保護者の声で「保育園に幼稚園のやり方をふくめてもよいのではないでしょうか。」といったものがあり、保育士たちはそういった声を受け止めているといえる。しかし、統計的には保護者との意識の差が明らかであり、保護者は保育士に対してもっと他の役割を期待していることがわかる。また「子育ての相談相手」についても、保育士は今の保育所をめぐる様々な動向を踏まえて子育て相談を行っていく必要性を認識しているが、保護者の方は保育所を利用しているという段階で、他者との協力関係の中で子育てを行っており、敢えて相談相手として保育士を認識する必要性が低いこと、特に本調査対象が5歳児の保護者であり、子育ての相談が特に必要と思われる乳児期を対象としていないため、必然的に数値が低くなっていることが考えられる。

3）子育て支援の必要性

子育て支援の必要性について、保育者のあり方と同様4段階で尋ねた。全体では、3.47と高い得点となっており、子育て支援に対する意識の高さが伺える。各基本的属性ごとに見た得点については、表3のとおりである。t検定の結果、保育所保育士（3歳以上児担当）と保育所保護者の間に有意な差が見られた（$t=2.25$ $p<0.01$)。保育所は、今日の保育サービスのあり方で、子育て支援サービスをどれだけ充実していくことができるかが求められており、保育士はその動向をキャッチし、必要性を感じていること、また日頃の保育のなかで、保護者だけに子育てを委ねることが難しい状況が起こってきていることから、その必要性を高く認識

していると言える。その一方で保護者は先にも述べたように、すでに保育所を利用していることからも、その必要性をあまり実感できないといえる。

表3　子育て支援の必要性

幼稚園	3.49
保育所保育士（3歳以上担当）	3.63
（3歳未満児担当）	3.70
幼稚園保護者	3.37
保育所保護者	3.43
10年未満	3.65
10年以上	3.57
職あり	3.43
職なし	3.36

4）具体的な子育て支援サービス

全体としての結果は、表4のとおりである。「一時保育」のみが過半数を超えており、最も求められている子育て支援サービスと言える。

表4　具体的な子育て支援サービス

	延長保育	一時保育	乳児保育	地域子育て支援センター	地域活動	障害児保育	育児相談	休日保育	家庭的保育	病後児保育	産褥期ヘルパー	訪問一時保育
全体	24.1	58.3	19.6	25.6	18.9	27.1	42.8	13.6	2.8	16.5	21.6	12.5
幼稚園教諭	16.5	59.5	10.1	46.8	7.6	44.3	83.5	2.5	1.3	6.3	17.7	1.3
保育所保育士(3歳以上)	9.1	56.1	33.3	37.9	12.1	24.2	74.2	7.6	3.0	10.6	16.7	12.1
幼稚園保護者	32.4	67.3	12.5	23.1	21.0	24.6	32.0	9.3	3.2	11.7	28.1	16.7
保育所保護者	26.8	51.3	21.2	12.3	24.9	26.4	24.5	26.0	1.9	28.6	18.6	13.4

①保育者

幼稚園教諭と保育所保育士（3歳以上児担当者を抽出）について見ると、「延長保育」、「一時保育」、「地域子育て支援センター」、「障害児保育」、「育児相談」、「産褥期ヘルパー」の6事業で幼稚園教諭が保育所保育士より必要性を感じている。χ^2検定を行った結果、「乳児保育」（$\chi^2=15.44$, df＝1, $p<0.01$）、「障害児保育」（$\chi^2=9.72$, df＝1, $p<0.01$）、「訪問一時保育」（$\chi^2=5.43$, df＝1, $p<0.05$）の3サービスにおいて有意な差が見られた。「乳児保育」について、保育所は「保育に欠ける」という視点からサービスを提供しており、就労する保護者の増加を踏まえてその必要性を感じていることがわかるが、幼稚園は自分たちがそのサービスを行わなければならないという認識は低いと言える。「障害児保育」は、幼稚園教諭の方が高い割合となっている。保育所はすでに取り組まれているサービスであるため、それほど認識が高いわけではない。「訪問一時保育」については、幼稚園教諭、保育所保育士のいずれも低い数値となっており、13事業において重要度は低い。今日の地域社会や家庭のあり方を見ると、日頃子どもを育てている保護者が何かの理由で急に子どもを預けなければならなくなったとき、簡単に預けられる存在がない人たちも多い。そういった保護者のニーズに応える必要性もあり、「来所型」に加えて今後は「訪問型」の子育て支援サービスにも取り組まれていく方向性にある。幼稚園教諭、保育所保育士のいずれにおいても重要度は低いが、「来所」を中心に取り組んできた幼稚園にとって、「訪問」の必要性はまだ認識されていないということが考えられる。

保育士について、3歳未満児担当者と3歳以上児担当者とを比較すると、図6のとおりである。「育児相談」

が圧倒的に高い割合となっており、担当者の違いに関係なく、その重要性を感じている保育士が多い。χ^2検定を行った結果では、有意な差が見られるサービスはなかった。保育士の担当クラスは年々変わるものであり、乳児を担当することもあれば、就学前の子どもを担当することもある。それぞれの年齢を担当していることで、今の担当クラスに左右されない、保育士としての選択をしているため、このような結果になったと思われる。

保育者の経験年数の違いによる差については、図7のような結果となった。χ^2検定を行った結果、「延長保育」（$\chi^2=4.26$, df＝1，$p<0.05$）、「障害児保育」（$\chi^2=6.92$, df＝1，$p<0.05$）の2つのサービスで有意な差が見られた。どちらのサービスも経験年数の短い保育者の方がその必要性を感じている。「延長保育」、「障害児保育」のいずれについても取り立てて新しい子育て支援サービスではない。「延長保育」もサービスそのもので見るとその必要度は他のサービスと比較して決して高いとは言えない。この設問では「重要と感じられるサービスを3つ選択」という形で尋ねているので、経験年数の長い保育者ほど、すでに取り組まれてきて

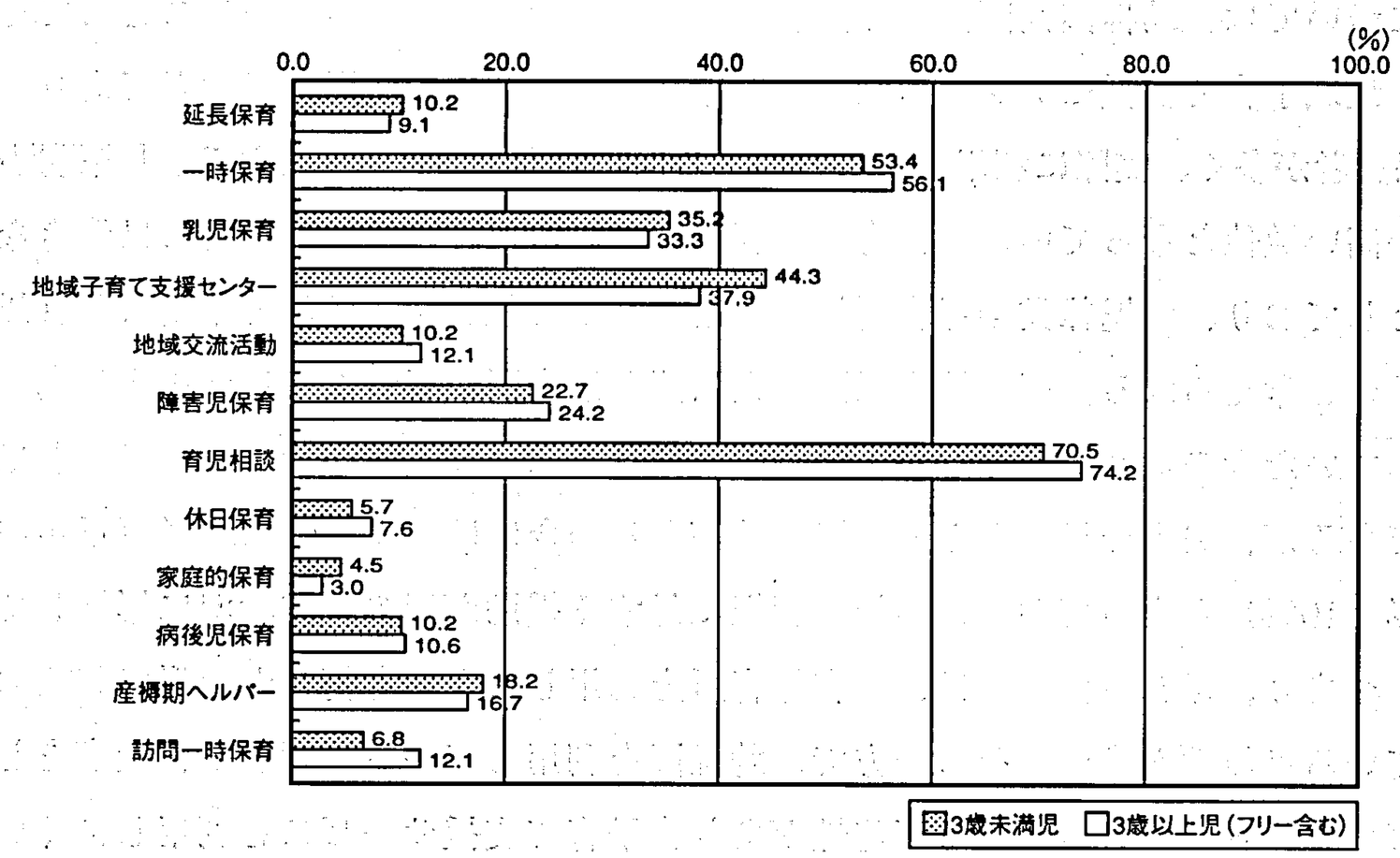

図6　具体的な子育て支援サービス（保育士担当クラス）

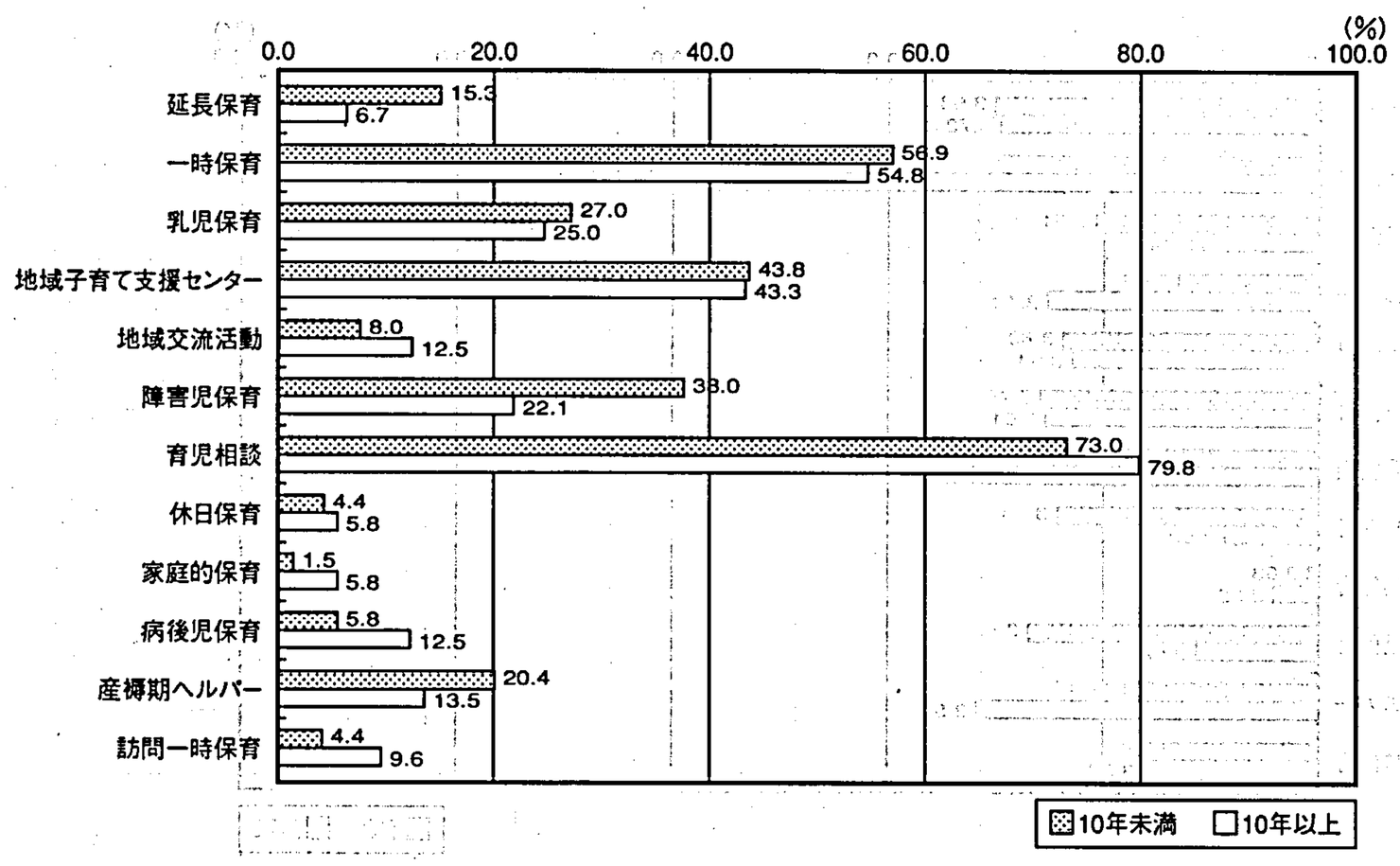

図7　具体的な子育て支援サービス（保育者経験年数）

いる子育て支援サービスよりも新たな方向性を示すサービス（幼稚園や保育所を利用していない保護者に対するサービス）を選択した結果と考えられる。

②保護者

保護者間での比較について、χ^2検定を行った結果、「一時保育」（$\chi^2=14.52$, df＝1，p<0.01）、「乳児保育」（$\chi^2=7.53$, df＝1，p<0.01）、「地域子育て支援センター」（$\chi^2=11.01$, df＝1，p<0.01）、「休日保育」（$\chi^2=26.83$, df＝1，p<0.01）、「病後児保育」（$\chi^2=24.48$, df＝1，p<0.01）、「産褥期ヘルパー」（$\chi^2=6.95$, df＝1，p<0.01）の5サービスにおいて有意な差が見られた。「乳児保育」、「休日保育」、「病後児保育」については、保育所保護者の方がその必要性を感じており、就労している保護者を支えるサービスとして認識されていることがわかる。その一方で、「一時保育」や「地域子育て支援センター」といった普段幼稚園や保育所を利用していない保護者を対象としているサービスについては、幼稚園保護者の方が重要と感じている。保育所保護者は今回調査対象となっている保護者が利用するサービスではないことから、低くなっていると思われる。幼稚園保護者については、幼稚園入園前の保護者の子育てをサポートするサービスとしてその必要を感じていると言える。地域子育て支援センターの利用者を考えると、3歳未満児の保護者であり、幼稚園への入園を考えている保護者が多く、実際に利用したことのある保護者もいると考えられる。「産褥期ヘルパー」は幼稚園保護者の方が高い数値となっている。保育所を利用している保護者は、基本的には働きながら子育てをすることを前提としており、育児休業や保育所等を活用しながら就労を続けるとしてもそれ以外の支援を受けていることが多いと考えられる。国立社会保障・人口問題研究所が行った第12回出生動向基本調査によると、結婚前就業していた妻の最初の子どもが1歳時の就業状況は専業主婦が約7割、就業者は27%（うち正規雇用は18%）であるが、夫妻の母親からの育児援助がある場合には、就業者は32%（正規雇用23%）、援助がない場合は20%（10%）となっており、親族の育児に対する援助が妻の就業状況に影響していることを明らかにしている。つまり、保育所保護者は、現在保育所を利用しながらも何らかの形で親族の援助を受けながら仕事を続けている可能性が高い。その一方で、幼稚園を利用している保護者は、仕事をしていないということから、子育てを一身に背負っている可能性があり、子育て支援サービスを利用しにくい現状があると思われる。そのような幼稚園保護者にとって、産褥期ヘルパーは、仕事をすることを前提としていない

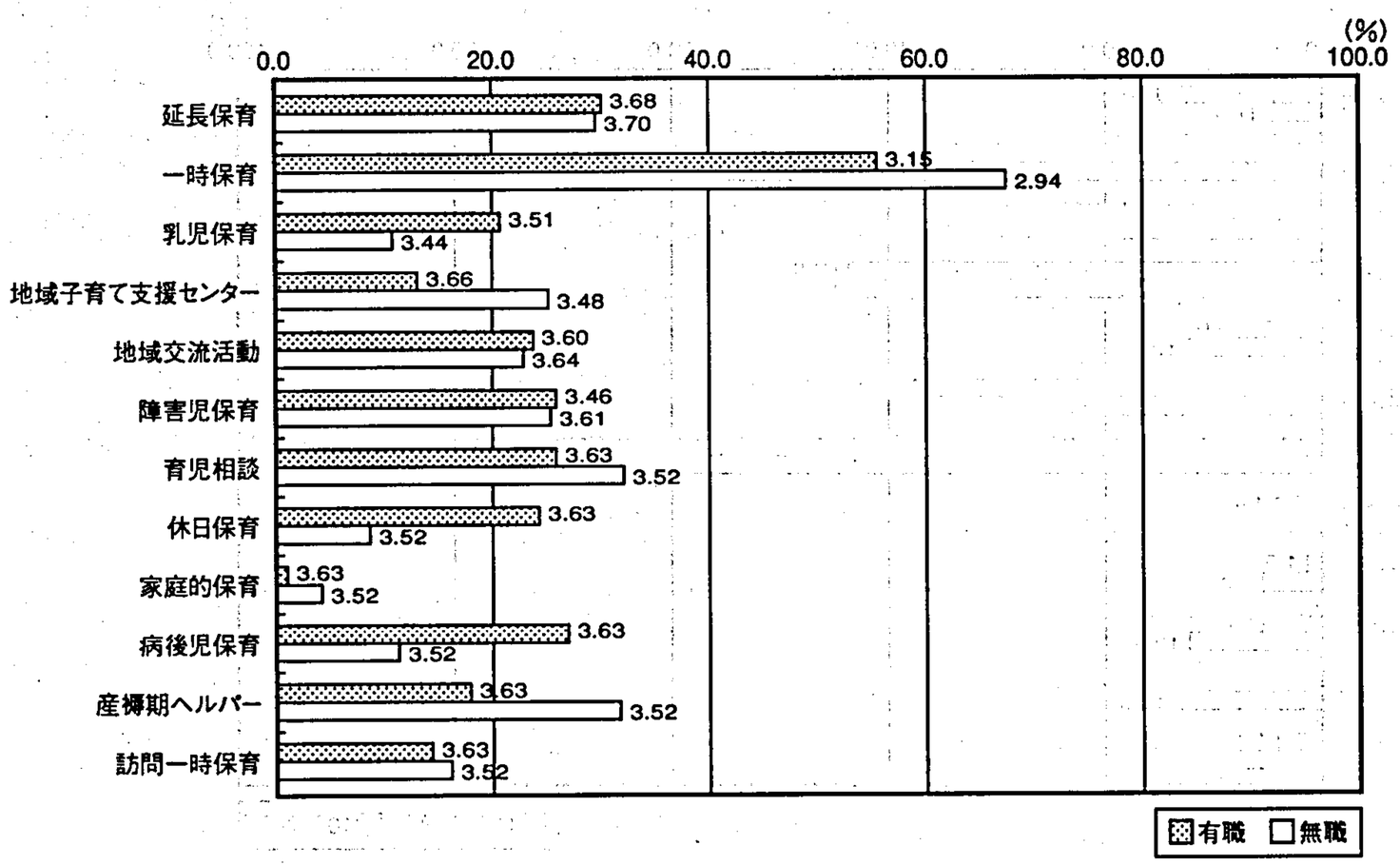

図8　具体的な子育て支援サービス（保護者：職の有無）

保護者を支えるサービスとして認識されているのではないだろうか。

保護者の就労の有無による差を見ると、図8のとおりである。χ^2検定の結果、「一時保育」($\chi^2=7.95$, df=1, p<0.01)、「乳児保育」($\chi^2=9.04$, df=1, p<0.01)、「地域子育て支援センター」($\chi^2=12.72$, df=1, p<0.01)、「休日保育」($\chi^2=21.58$, df=1, p<0.01)、「家庭的保育」($\chi^2=5.08$, df=1, p<0.05)、「病後児保育」($\chi^2=19.24$, df=1, p<0.01)、「産褥期ヘルパー」($\chi^2=13.13$, df=1, p<0.01) の7つのサービスで有意な差が見られた。ここでも、保護者間の比較と同じように、「乳児保育」、「休日保育」、「病後児保育」に対する就労している保護者の期待は高い。それに対し「一時保育」、「地域子育て支援センター」は就労していない保護者からの期待が高くなっている。このことは、回答者の基本的属性から幼稚園保護者の多くが就労していないこと、保育所保護者のほとんどが就労していることからも、保護者間での比較と同様の傾向が見られることは明らかである。また、「家庭的保育」及び「産褥期ヘルパー」においても、就労していない保護者からの期待が高くなっている。「産褥期ヘルパー」については就労していない保護者の3割がその必要性を感じていることがわかる。この結果は前述の幼稚園保護者に産褥期ヘルパーへの期待が高いことへの裏付けにもなる。

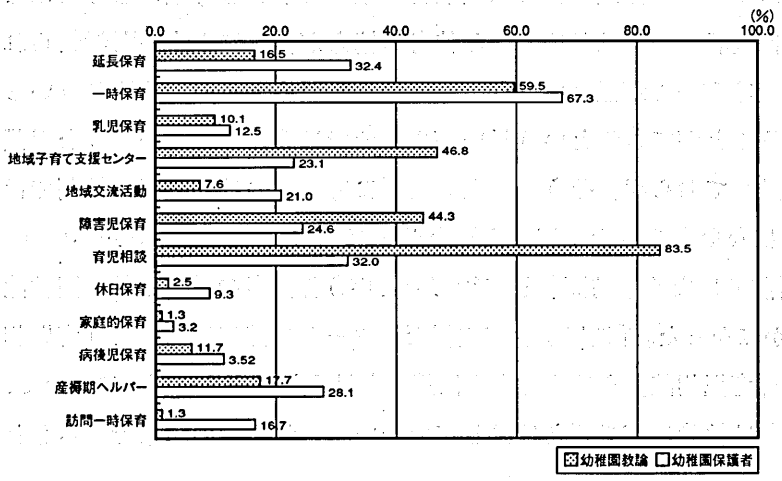

図9　具体的な子育て支援サービス(幼稚園教諭—保護者)

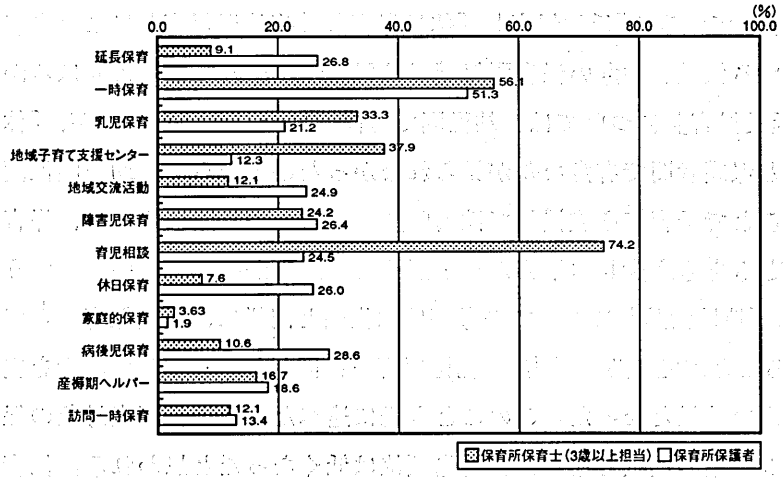

図10　具体的な子育て支援サービス(保育所保育士—保護者)

表5　具体的な子育て支援サービス
(保育者 — 保護者)

	幼稚園			保育所		
	χ^2	df	P	χ^2	df	P
延長保育	7.62	1	*	19.47	1	*
一時保育	n.s.			n.s.		
乳児保育	n.s.			8.33	1	*
地域子育て支援センター	17.06	1	*	49.14	1	*
地域活動	7.49	1	*	12.34	1	*
障害児保育	11.71	1	*	n.s.		
育児相談	66.64	1	*	92.78	1	*
休日保育	n.s.			26.60	1	*
家庭的保育	n.s.			n.s.		
病後児保育	n.s.			21.26	1	*
産褥期ヘルパー	n.s.			n.s.		
訪問一時保育	12.76	1	*	n.s.		

③幼稚園教諭・保育所保育士（3歳以上児担当）と保護者

幼稚園、保育所それぞれにおいて保育者と保護者間での比較を行った。全体の結果、χ^2検定の結果は図9、10及び表5のとおりである。

幼稚園について見ると、13事業中、6事業で有意な差が見られた。「延長保育」、「地域活動」、「訪問一時保育」の3事業は保護者の方が教諭より高い数値となっている。「延長保育」は幼稚園の預かり時間をもう少し長くして欲しいという保護者からの希望の現れと言うことができる。幼稚園の基本開所時間である4時間を超えて希望する子どもを預かる「預かり保育」を実施している園は年々増加の一途をたどっている（2002年6月で実施している園は8,473園であり、幼稚園全体の61.0%となっている）。幼稚園教諭の認識よりはるかに多くの保護者が希望していることがわかる。「地域活動」については、先の結果でもわかるように保護者は子どもに幼稚園だからできるような経験をして欲しいと願っている。設問で挙げたような地域にある高齢者施設でのお年寄りとの交流といった経験は、幼稚園という集団に所属することでできる体験とも言える。「訪問一時保育」は、先に述べた「仕事をしていない保護者に産褥期ヘルパーの希望が高い」という結果と同じ様な考察ができる。つまり、幼稚園を利用している保護者は、幼稚園以外の子育てサービスを利用することが少なく、保護者のみで子育てをしているケースが多い。保護者自身に突然何か起って子どもを預けなければならない時、保育所を利用している保護者は保護者の親をはじめとする他者の協力が得られやすいと考えられるが、幼稚園保護者にはそういった支援を受けることが難しい人が多いと考えられる。そのため、こういったサービスがあれば、安心して子育てをすることができるという思いがあるのではないか。このような保護者の実情に対して、幼稚園教諭はあまり認識しておらず、そういったニーズに応えるのは幼稚園の役割ではなく、保育所の役割として考えているのではないだろうか。同じようなサービスに「一時保育」があるが、これは「来所型」のサービスである。「来所」ではなく「訪問」して欲しいという保護者の希望と幼稚園教諭の認識に差があることもこの結果から明らかになった。「地域子育て支援センター」、「障害児保育」、「育児相談」は幼稚園教諭の方が高い数値であった。「育児相談」を始めとする保護者を対象とするサービスについて、教諭側は必要性を高く捉えているが、保護者は教諭ほど必要とは感じていない。これまでの結果でも示されたように、幼稚園保護者の傾向である。

一方、保育所については、「一時保育」、「障害児保育」、「家庭的保育」、「産褥期ヘルパー」、「訪問一時保育」の5事業を除いて有意な差が見られた。保護者の意見が各事業に比較的分散しているのと比べると、保育士は「育児相談」と「一時保育」に意見が集中している。「延長保育」、「休日保育」、「病後児保育」はこれまでの結果からも明らかなように、仕事をしている保護者が多い保育所保護者は保育士が感じているよりはるかにその充実を願っていることがわかる。「延長保育」については、幼稚園でも同じ様な結果であったが、「休日保育」や「病後児保育」については教諭と保護者間で有意な差が見られなかったことからも、幼稚園保護者が「一日の保育時間をもう少し延長することで子育てを支援して欲しい」と願っているのに比べて、保育所保護者は「仕事をしやすくするために子どもをもう少し（早くから・遅くまで）預かって欲しい」という仕事との両立から願っていることがわかる。「地域活動」についての考察は幼稚園と同様に、集団保育ならではの体験をさせて欲しいという希望と考えることができる。一方、「乳児保育」は同じ仕事をする保護者を支えるサービスでありながら、保育士の方が高い結果となった。このことも既に述べたように、調査対象の保護者が5歳児の保護者であり、13事業から3事業の選択となれば、優先順位は低くなったと思われる。保育士は、今日の保育状況や待機児童の現状を考えると、もっと充実させるべきと捉えている。「地域子育て支援

センター」や「育児相談」も同様のこと（調査対象者）が言えるだろう。

4．まとめと今後の課題

今回の調査研究を通して、保育者の役割及び子育て支援サービスを保育者自身の意識と保護者の意識の差から明らかにすることができた。

保育者の役割について、「知識の習得」と「子育ての相談相手」の二つの役割がポイントになることが明らかになった。就学前の子どもたちに小学校に入学しても困らない知識を提供することの必要性についてはここでは問うことができない。ただ、保育者が認識しているほど、そのことを保護者は保育者に期待していないということである。むしろ、幼稚園や保育所といった同じ年代の子どもたちが一緒に過ごすことのできる場だからできることを期待している。以前であれば、幼稚園や保育所でなくても、家庭や地域社会のなかで体験できていたことが、今では難しくなってきている。子ども同士で遊ぶということ一つとっても、同じ地域にいる子どもたちが全員一つの園に通っている、という地域もあり、幼稚園や保育所が「子どもを保育する場」以上の役割を担いつつある。保育者には、子どもが多くの体験を重ねて人間性豊かに成長していくことができるような働きかけが求められている。特に幼稚園については、保護者の期待が「家庭でできることより幼稚園だからできることを」という姿勢が保育所と比べると顕著である。保育者の役割として、そういった保護者の期待により応えていく姿勢を示すのか、それとも「子育て」を「共に」行うという姿勢を示すのかは今後の課題と思われる。また、保護者の子育てについての相談に応じることについて、幼稚園、保育所のどちらも保育者と保護者の意識の差が明らかであった。保護者が子育て相談を保育者を含めた専門職に期待していない、という結果は先行研究からも明らかにされている。厚生労働省による「子育て支援策等に関する調査研究」（2003）では、母親の子育てに関する相談相手として、「配偶者・パートナー（父親）」88.8%、「自分の親」73.3%、「近所の知人」47.1%となっている。これら身近な人たちに比べて、「子育てサークルの友達」14.3%、「医師・保健師等保健医療関係者」10.1%、「公的な相談機関」3.4%と専門家を相談相手としてあげた母親は少なくなっている。しかし、今日の社会状況から、身近に相談相手のいない保護者も多い。保護者が子育ての相談相手として保育者を認識することができるよう「相談相手としての保育者」像を確立していく取り組みが必要ではないか。

子育て支援サービスでも、保育者と保護者の間で意識の差が明らかになった。保育所がここ数年、特別保育事業という形でさまざまな保育サービスを充実させてきたことや、それらのサービスを利用することに慣れてきていることと比べると、幼稚園はまだその意識が低い。しかし、仕事をしていない保護者が利用できるサービスに対する期待は高い。「地域子育て支援」の取り組みは今後ますます必要とされていることがわかる。

今回の研究を通して、保護者の期待から見た保育者のあり方を知ることができた。この結果を元に保育者と保護者の意識をより近づけていくために必要なことは何か、が今後の課題として残っている。保育者と保護者が「子育てのパートナー」として互いの役割を明らかにし、よい協力体制の元で子育てが行われることが、子どもの最善の利益を尊重することにつながると思われる。

参考文献

・幼稚園教育要領　1998.

・文部科学省（2001)、幼児教育振興プログラム、http//mext.go.jp/b_menu/houdou/13/03/010322.htm、2004.3.4)
・文部科学省（2002)、「預かり保育」の参考資料、http//mext.go.jp/b_menu/houdou/14/06/020604.htm、2004.3.4)
・石井哲夫監修、よくわかる新・保育所保育指針ハンドブック、学研、2003.
・鈴木佐喜子・堀江まゆみ・若松美恵子・喜多村純子、保育者と親の食い違いに関する研究―保育、子育ての問題を中心に―、保育学研究、第37巻第2号、1999.
・高濱裕子、子どもをめぐる大人の役割と関係の認識：幼稚園教諭と母親の比較から、保育学研究、第38巻第1号、2000.
・国立社会保障・人口問題研究所（2002)「第12回出生動向基本調査」
(http://www.ipss.go.jp/Japanese/doukou12/chapter5.htm、2004.3.4)
・厚生労働省(2003)「子育て支援策等に関する調査研究（報告書概要版)」
(http://mhlw.go.jp/houdou/2003/05/h0502-1b.htm、2003.12.10)

＜保育者への期待　自由回答＞

1）幼稚園保護者

・ピアノ、手遊びの保育のスキルというよりも、その子の能力・長所を引き出すような接し方やスキルを高めて欲しい。
・保育園でなく、幼稚園に通っているので、それなりに充分子供を保育し、見ていてくれて欲しい。
・それぞれの子どもの個性を認め、良いところはほめて自信を持たせてほしい。
・色々な先生がいるなと思います。「幼稚園の先生はやさしい」という私の中の常識をくつがえされた時はもうその先生に期待しませんでした。はやく担任に変わってほしかったです。
・公立の幼稚園に入れたのですが⑤に関してはこちらから聞かなければほとんどなく（担任によります）すごく 不満です。⑧に関しては、ピアノ、手遊びというよりもっと他園（私学）などの保育内容を研究したり、もっと教材研究し、保育する能力(子供への言葉かけなども）を高めてほしいです。(人によりますが)
・保育者の行動、感情、考え方がすべて子どもに反映するので個人的感情はあるだろうけれど、おさえて、子どもを公平に扱ってほしい。園での様子も公平な目で見て細かく教えてほしい。今通っている園は連絡帳がなく、不安があるので。幼稚園等では家庭ではなかなかできない体験をさせて欲しい。今、家に畑のある人とか少ないので、そういう経験をさせてもらえるとうれしい。
・子どもの言・動・様子についつい敏感に反応してしまいがちな親ですが、担任の先生はじっくり子どもの様子をみていて、いつも的確にアドバイスしてくれます。すべて子どもの成長の過程の一つであり、じっくり見守って下さり、笑顔で励まして下さいます。専門的な知識、技能があるに越したことはありませんが、一番先生に求めることは、人としてあたたかく、信頼できること（親が安心して心を開けます)、明るく元気でいつもハツラツとしていること（こちらまで、元気になります）を望みます。また、担任の先生は、常識的なしっかりした信念を持って子供たちと接して下さるので、親としてはとてもとてもありがたい先生です。
・親では見れない部分（親の前と親がいない時の子供）の行動で、良い面、悪い面を見つけてもらえるとありがたい。
・1，2，4は家庭でやらなくてはならない事だと考えています。が、集団でしかできない事はお願いしたいです。・3，7は必要で、そうあってほしいと願います。・5はあまり知らなさすぎると親同志の中での憶測にまかせて悪い方向に行きがちなのでなるべくならば知らせて欲しいと思います。・8は保育士の方についての事と思いますが、ある程度の能力があればそれでいいと思いますので、それよりもっと子供との接し方、女の子、男の子問わずつきあえる、元気な先生を希望します。男性の保育士の方もこれからは必要だと考えてます。(女性の保育士の方にできない、または、持っていない考え方もあると思いますし、子供も男女いるのですから）特に男の子は男性の保育士の方から男性の力強さ、おおらかさ、男性としてのやさしさを学べるのではないでしょうか？
・よい所を探してたくさんほめてあげてほしい。
・連絡ノートのようなものがあれば子供のようすが分かってよい。
・子供のもちものの評価をするべきではない。(例えば手作りカバン、お弁当等）それは子供自身とは関係がない。
・家庭での様子を保育者から聞かれる事もなく、月に1度の園だより（園からの手紙）でも、全体での園の様子ばかりで普段か

ら園での様子がわからない。連絡帳の様なもので毎日ではなくても週に１度でもいいから個々の様子を書いたものなどで伝えてもらえると家庭で子供と話し合う機会が増えると思う。
・子どもと同じ気持ちになっていっぱい遊んでくれる事。その中で色々な経験、体験を一緒にし、感動する心を 一緒にもってもらう事。
・幼稚園へ行く事を嫌がっていないのできっと楽しんでいるのでしょう。集団生活と友達と遊ぶ事が楽しければ充分と思います。
・ボール投げや楽器等様々なことを体験させてほしい。
・お友達にけが等をさせた場合、両方の保護者に知らせてほしい。
・家庭の中でみる子供と、集団の中での子供は違うかと思う。家族の中では甘えていると思う反面園での様子をうかがうと、そんな対応もできるのかと発見できる事、多々あります。気付いた事があったらできるだけお話していただけたら…と思います。
・全ての子どもを大切に思っていただければ幸いです。
・大勢の子供達をみて下さっている先生方は大変だと思います。教えてほしい事、聞きたい事があったら、親がたずねていく事が良いと思う。
・事務的ではない、人として心ある応対をして欲しい。若い先生は子供にとって良いこともあるが、親にとっては年輩の先生の方が自分の親のように、又、教師のように教えてもらえる事や、励ましてもらえることがあるので助かる。
・人としての道徳的なこと、モラルなどの基本を心で理解できたら、と思う。
・保護者に対してではないのですが。泥遊びや、虫捕りなど子供どうしで夢中に遊んでほしいので、「～ちゃん、服が汚れるよ。やめなさい」等、制止をしないでほしい。滑り台などの遊具が、安全性を重視しすぎた物が多くかえって子供の運度能力の発達を阻害しているように思う。
・母親の代わりのようなことは、しなくてもよいと思う。一歩引いたところから子どもの成長を見守っていく位がいい、手とり足とりは、こちらがすること。
・学があるとかブランド物を身につけているという事ではなく、保育士の御自身の品格のようなもの。毎日接するうちに必ず子供に伝わっていくと思うから。
・近年低下が著しい運動能力を伸ばす活動をもっとしてほしい。
・子供の自立や社会性、情操などの成長をささえてもらいたい。家庭ではできない部分について遊ぶ中での子供が精神的にも肉体的にもぶつかることがあった時の補助になってほしい。
・子どもたちが、園で友だちと一緒に過ごす中で、遊びの（トラブル解消の）指針を示してくれたり、危険のないように見守ってくれればよいと思っています。
・親への子育てに関する、学習やお話をして、子育ての知識、意識を高めてほしい。
・けんかやトラブルが起きた時、１人１人の言い分を聞いて、それぞれに対応してほしいです。
・園での行事やカリキュラムにおわれる事なく子供同士の関わりや子供の気もちによりそうように接して欲しい。みんな同じ事ができなくてあたり前一人一人をきちんと見て欲しい。
・四季折々を体で感じさせてほしい。（毎日、散歩や外遊びをさせてほしい）
・希望することはたくさんあるけれど、一度も登園拒否をすることもなく、毎日とても楽しそうに通っているのを見ていると、うれしく思います。先生方に感謝しています。
・子どもとの遊びに熱中しすぎて、周りの子どもの様子をみていない先生が多すぎる。
・子供の頑張りをほめてほしい。
・園で危険な場所があるので良く見てほしい。ホールの窓の近くに、平均台があったり、とび箱があったり、とても危険だと思う。
・保育者だけではなく家庭での教育と連結して子育てができると良い。子どものしつけは家でのほうが大きい。
・もっと「仕事」というわりきりではなく、暖かい気持ちで接して欲しい。小さいこどもから大人が学ぶことの方がたくさんあるのに、心の冷たい未熟な先生がいるともう一度学び直してから来てほしいと思う。叱るべきところをしっかりと叱ってほしい。が、いつまでも言いつづけないでもらいたい。子供はあんな小さくてもちゃんとわかっているのです。

2）保育所保護者
・私の母が保育士だったので、小さい時から仕事の話や現場を知る機会がありました。保育者は、母親等も含めてですが、とにかく子供ひとりひとりを受容し、しっかりとしたその人なりの信念と情熱が必要だと思います。子供のよりよい心身の成長を願うというのが大前提で、個別の信念は保育者ごとに違っていてもいいと思います。いろんな人間がいて、いろんな考えがあっていいと思うからです。ただ、保育園としては、園の方針、ビジョンは統一し、職員が協力と連携をとる必要があります。また、職員間の連絡体制がキチンととれていると、保護者としては安心します。（ある先生に伝えた必要な情報がちゃんと他の職員にも伝わっていると何度も話をしなくていいし、園の体制がしっかりしているなと感じられます）。
・保育者の年令にかぎらず、一般的にいって、“情緒豊かに”ということについての工夫や努力が皆無と思う。ビデオを観せたり、チャカチャカうるさい音楽をボリュームいっぱいに流したり、この程度の相手をしていればよいという安易な保育がまかり通っているのはおかしいと思う。子供のうちにおもいっきり豊かなものに心を開かせようというシュタイナーの思想など少しはその姿勢だけでも学んでほしい。
・現実的にあきらめています。特に３歳未満児。
・いつもと違った事があったら、その日のうちに知らせてほしい。子供の言う事をきちんと聞いてほしい。「他の子がそうだか

ら」と行動などをさまたげないでほしい。
・なにか問題を子供がおこした時、なんでその様な行動をとったのか、子供の心を理解してほしい。悪い事はきっぱりと言ってほしい。
・色々なことに挑戦、経験できる場を持ってほしい。危険等を避けるために、だんだんと保育士（公的な）が保守的ななっている様な気がする。生き生きとした保育をしてほしい。
・型にはめず、個性を大切にしてほしい。
・園でのケガやケンカをした時は必ずしらせてほしい。
・子供たちの事は、公平に接してくださっていると思います。
・これからの保育園は、今まで通りの考え方を少し変えて、幼稚園に保育園のやり方をふくめてもよいのではないでしょうか。
・１人１人の個性を見極めて接してほしい。
・８番のように、ピアノや遊びが下手でもかまわないと思いますが、子どもの気持ちなどをわかってくれる様な、もっと見えない部分の能力の方が重要だと思います。
・人間関係について特に６才までのすごし方が、非常に小学校へ行ってから影響があるように思っています。人を傷つける行動や、言葉使いに対して注意をはらってくれたり、友達と仲良く遊べるよう、配慮して下さるような、先生（保育士）のいらっしゃる保育園とご縁があってよかったと思っています。
・集団でのかかわりや、がまんすること。
・保育園の方針や先生の人がら（コミュニケーション）知りたいと思う
・のびのびした中で友達関係を築き、たくさん遊べる。今の年齢にあった活動（今しかできないこと、楽しいなと思える）。
・先生方にもいろいろな方がいらっしゃるが、時々感情的に子供に接しているのを見ると、（決まった先生）少し“どうかな”と思う時がある。
・頭から怒るのではなく、子供の目線に合わせて物事を考え、子供の立場、考えを理解し、その上で教育者としてアドバイスをして欲しい。そして、その旨伝え、親にも相談やアドバイスをして欲しい。
・けがや病気の前兆を見逃さないで欲しい
・親の方は生活にゆとりがなくイライラしがち。園ではゆったり楽しい場であって欲しいので先生方にはゆとり の中で子供に接して欲しい。
・家庭で基本的な事をしていくのが一番良いと考えているので、保育園、学校では補助してくれればいいと思ってます。
・園に園長の孫がいて、かなり他の子をいじめたりしているが、先生方も注意できない。また、子供がケガをしても全く知らなかったと言う事が多すぎる。ケガをさせるのは、園できちんと見てくれていないのでは？と不安になることしばしば。
・あまりひんぱんに保育者が変わるのも困ります。できれば２年くらい同じ先生に見ていただけると子どものこともよく知っていただけて良いと思います。
・視野の広い保育者であったほしい。国際的な拘留もあるとよい（他の国の人とのかかわり）。正しい日本語、ていねいな話で子供と接してほしい。
・預けている時は園や先生におまかせしていると思っているので先生方との信頼関係もあると思います。
・一人一人の子供をよく観てくれること。子供の気持ちをよく理解した上で、対応してくれること。

３）幼稚園教諭
・とにかく子供をかわいがってもらいたい。そしてわが子の良さや可能性を引き出しそれを大事に育てていって欲しいと思っている。
・子育てに対する不安や悩みなどに対して話を聞いてもらいたいと思っている。
・公立の幼稚園に対して３歳児が抽選なしで入れるように、通園バスや駐車場の問題、保育の延長や緊急時の一時あずかりの希望など。
・社会生活を送るうえで必要なルール（良いこと、悪いこと）を学んでいくこと。
・７の項目について、自分の子供を優先に目を向けてほしいと思っている親が多くなっているように感じる。
・子供の教育に対しても強い期待を持って子供をあずけていることはたしかなことではあるが同時に親の種々な都合で子供の教育とは別の期待を持ってあずけている人もいる。

４）保育所保育士
・子どもが安心できる、やさしい保育者。子どもが伸び伸びと自分を出せる保育園。子どもがよろこんで行く保育園を望んでいると思います。
・自分の子どもに対して期待しすぎてしまうことがあるので、幼児期はもう少しのんびりと見てほしい。個人差があるのがあたり前と思ってほしい！
・園（集団生活）でしかできない経験をしてほしいと思ってるのではないでしょうか。
・自分の子どもに合った保育をしてほしいということ。